

岸和田藩蔵版の『重訂本草綱目啓蒙』

『本草綱目啓蒙』の初版は、享和三年から文化三年にかけて出版された。刊行の終わった文化三年の三月四日に江戸に大火が起こり医学館が類焼した。文化八年から十二年にかけて、再版本が刊行された。さらに、梯南洋が補正した『重修本草綱目啓蒙』が弘化元年（一八四四）に学古館蔵版で刊行された。これは木活字版であるから、あまり大部数ではなかったと思われる。弘化四年（一八四七）から嘉永三年（一八五〇）にかけて、『重訂本草綱目啓蒙』全四八卷二〇冊が、「岸和田邸学蔵版」として出版された。本書を藩の財政によつて出版するにいたった経緯は、本書に寄せた藩主岡部長慎の序文にくわしく記されている。本書はきわめて広い対象を扱って、しかも整然としており、簡潔にして十分な叙述である。初学者、医師のみならず、自然科学者、政治・行政にたずさわる人びとの家にも備えるべき書である。偉大な労作を世に役立てたいものと考えて、この申し出を受け、出版することとした。

かつて先君伯将侯（長泰）が『本朝食鑑』を出版し、それに序を寄せたが、そのあとにならうものである。ついては、侍医井口望之に命じて、『啓蒙』に洩れたるものを集めて『啓蒙拾遺』とし、また、図を描かせて『図譜』とし、これらを併せて出版する。

井口望之については本書出版の年、弘化四年の『御家中分限録』に「八人 毎年銀五枚 井口栄達」とその処遇が記されている。「望之」が名乗で、「蘇仲」は字であろう。号は楽三である。本文の校合は望之みずから当たるほか、藩士の関恒孝・南川謙の両名が手伝った。